OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 口承文芸における場面転換の効果 : ホメロス『イリアス』の同型表現を中心に |
| Author(s) | 三浦, 円佳 |
| Citation | 平成29年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2018 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68088 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 平成２９年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

| ふりがな<br>氏　　名 | みうら　まどか<br>三浦　円佳 | 学部<br>学科 | 文学部人文学科 | 学年 | 3年 |
|---|---|---|---|---|---|
| アドバイザー教員<br>氏名 | 西井　奨 | 所属 | 文学部 | | |
| 研究課題名 | 口承文芸における場面転換の効果―ホメロス『イリアス』の同型表現を中心に― | | | | |
| 研究成果の概要 | 研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。) | | | | |

**研究目的**

ホメロス『イリアス』はアカイア勢とトロイア勢の戦いであるトロイア戦争を描く叙事詩であり、一般に口承文芸として認められている。口承文芸には似たような場面の描写において、全く同じ表現あるいは一部だけを言い換えて表現する技法が存在するが、『イリアス』研究においては、個々の場面転換を取り出してその効果を論じているものがほとんどで、『イリアス』全体理解へ寄与しているものは多くない。加えて、後述する通り、先行研究において同じ表現を繰り返す技法が存在すると指摘されていながらも、日本語文献においてそれらを取りまとめたデータは見つからなかった。

そこで本研究では、『イリアス』の同型表現のリストを作成し、前後の場面や発話者を調査するとともに、それらが『イリアス』全体にいかに文学的効果をもたらしているか検証する。

**研究計画・方法**

『イリアス』の概略を先行研究などから調査し、同型表現の研究の妥当性を検討する。その後、表計算ソフトを用いて同型表現を洗い出し、その結果から場面転換の効果について論証する。

**研究経過**

**1.『イリアス』の同型表現研究の妥当性**

『イリアス』は、ホメロスという盲目の詩人の作として伝えられる、全部で 15693 行にわたるギリシャ最古の叙事詩である[1]。成立は前八世紀[2]と考えられており、内容はトロイア戦争の末期、十年目の数十日を描くものである。ただし、史実のトロイア戦争の伝承ではなく、後世の創作である[3]。『イリアス』は現在成文化されているが、当初は朗誦されるものであったため、口承文芸のグループに属する[4]。

『イリアス』には、一般的に認められている技法がいくつか存在する。その中でも、特に今回の研究と関係のあるものを二つ取り上げる。

一つ目は、formula（定型句）と呼ばれる技法である。これは、同じ語句が繰り返し用いられるものだ。定型句を使うことで、ギリシャ叙事詩が必要とする韻律を合わせやすくなる。具体的には、決まった名詞を修飾する epitheton と言われるものや、同じ動作・状態を表す描写 iterata などが存在する[5]。

---

[1] 高津、p. 56
[2] ジャクリーヌ・ド・ロミーイ、p. 13
[3] 同上、p. 36
[4] 岡、p. vii
[5] 同上、p. 478

もう一つは、parallel（照応）と呼ばれる技法である。これは、ある場面を範型とし、類型的な場面を描くものだ。この技法は口頭詩に由来するもので、詩人は先達の詩を繰り返し聞いて覚え、その記憶を活かして自分の詩に取り込んだ。そのため、自分の詩だけでなく他の詩から範型を持ってくることもある[6]。

formula の技法だけを踏まえると、同じ表現があっても、詩人に何らかの意図があると見なすのは難しい。だが、parallel の技法は、詩人が他の場面を意識しながらその場面を語っていると言えるため、epitheton や iterata といった formula を除いて同型表現を調査することには妥当性がある。

**2. 同型表現の調査**

上述の妥当性を踏まえ、以下の抽出条件で調査を行った。

≪抽出条件≫

①一行以上、完全に表現が一致している部分がある（それ以下だと epitheton である可能性が高いため）

②発話文である（地の文だと iterata である可能性が高いため）

③発話者とその受け手が場面ごとに異なる（同じ発話者だと、場面よりも単にその人物の特徴的な発話の可能性があるため）

但し、以上の三つの条件を備えていても、以下のような場合は場面転換に無関係とし、除外した。

≪除外条件≫

・同一のキャラクター・事物・出来事の形容をしている場合
・一致する部分だけでは、文意が成立しない場合
・多数に対し、注意を引くための呼びかけの場合
・三か所以上存在し、かつ、同一人物の発話が含まれる場合
・明らかな伝言や、引用をしている場合

この調査にあたり使用したテキストは、BIBLIOTHECA AUGUSTANA というサイトのものである。詳細については参考文献リストに記した。

まず、表計算ソフトに一行ごとにテキストを貼り付け、以下の関数を用いて重複を洗い出した。

=IF(COUNTIF($A$1:A1,A1)>1,"重複","")[7]

その結果、重複している表現は 623 種類となった。その中から、前後の場面を松平訳『イリアス』に照らして②と③の条件を満たすものを抽出し、上述の≪除外条件≫に従って除外した。

最終抽出結果は以下の 19 例である。また、表中の日本語訳は筆者の拙訳である。

[6] 岡、p. iv

[7] A 列にテキストを貼り付け、B 列にこの関数を入力している。すなわち、同じ行までのテキストの中に重複するものがあれば、B 列に「重複」と表示される。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ὦ δε γὰρ ἐξερέω, τὸ δὲ καὶ τετελεσμένον ἔσται· | 1歌212 | 8歌401 | 23歌672 | なぞり型 |
| | 次のように私は言うが、そのことは実現されるだろう。 | 女神アテネ | 最高神ゼウス | エペイオス | |
| 2 | ἐξαύδα, μὴ κεῦθε νόῳ ι, ἵνα εἴδομεν ἄμφω. | 1歌363 | 16歌19 | | 裏切り型 |
| | はっきり言ってくれ、我々の両方が知るために、心を隠さずに。 | 女神テティス | アキレウス | | |
| 3 | ἠδ' ἔτι καὶ νῦν μοι τόδ' ἐπικρήηνον ἐέλδωρ· | 1歌455 | 16歌238 | | 裏切り型 |
| | そして今もまたこの私の願いを叶え給え。 | 神官クリュセス | アキレウス | | |
| 4 | ψεῦδός κεν φαῖμεν καὶ νοσφιζοίμεθα μᾶλλον· | 2歌81 | 24歌222 | | 裏切り型 |
| | 偽りだと言って、むしろ顔を背けるだろう。 | ネストル | プリアモス | | |
| 5 | κεῖνος τὼς ἀγόρευε· τὰ δὴ νῦν πάντα τελεῖται. | 2歌330 | 14歌48 | | 裏切り型 |
| | かの人物はそのように宣言した。それが今や全て実行されようとしている。 | オデュッセウス | アガメムノン | | |
| 6 | ὥς σεο νῦν ἔραμαι καί με γλυκὺς ἵμερος αἱρεῖ. | 3歌446 | 14歌328 | | 裏切り型 |
| | それほど今はあなたを愛していて、甘い欲求が私を捉える。 | ヘクトル | 最高神ゼウス | | |
| 7 | εὖ γὰρ ἐγὼ τόδε οἶδα κατὰ φρένα καὶ κατὰ θυμόν· | 4歌163 | 6歌447 | | 例外 |
| | ἔσσεται ἦμαρ ὅτ' ἄν ποτ' ὀλώλῃ Ἴλιος ἰρὴ | 4歌164 | 6歌448 | | |
| | καὶ Πρίαμος καὶ λαὸς ἐϋμμελίω Πριάμοιο, | 4歌165 | 6歌449 | | |
| | すなわち私はこの胸においても心においてもよく知っている。いつか神聖なイリオスも、プリアモスも、丈夫な槍を揮うプリアモスの臣民も滅びる最期の日があることを。 | アガメムノン | メネラオス | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 8 | ἀλλ' ἄγε δὴ καὶ νῶϊ μεδώμεθα θούριδος ἀλκῆς. | 4歌418 | 5歌718 | | なぞり型 |
| | さあ、早速我ら二人も勇気の猛々しさを思い起こそうではないか。 | ディオメデス | 女神ヘレ | | |
| 9 | τίς νύ σε τοιάδ' ἔρεξε φίλον τέκος Οὐρανιώνων | 5歌373 | 21歌509 | | なぞり型 |
| | μαψιδίως, ὡς εἴ τι κακὸν ῥέζουσαν ἐνωπῇ; | 5歌374 | 21歌510 | | |
| | かわいい子よ、いったい誰がお前にそのようなことをしたのか。まるでお前が公然と悪いことをしたかのように。 | 女神ディオネ | 最高神ゼウス | | |
| 10 | εὐχος ἐμοὶ δώσειν, ψυχὴν δ' Ἄϊδι κλυτοπώλω ι. | 5歌654 | 11歌445 | | なぞり型 |
| | 私には功名を与え、馬で有名な冥王には命を与えることとなる。 | サルペドン | オデュッセウス | | |
| 11 | ἆσσον ἴθ' ὡς κεν θᾶσσον ὀλέθρου πείραθ' ἵκηαι. | 6歌143 | 20歌429 | | 裏切り型 |
| | もっと近くへ来い、そうすればお前はより早く破滅の終わりへ向かうだろう。 | ディオメデス | アキレウス | | |
| 12 | (…), σὺ μὲν οὐκέτ' ἐμοὶ φίλα ταῦτ' ἀγορεύεις: | 7歌357 | 12歌231 | | 裏切り型 |
| | οἶσθα καὶ ἄλλον μῦθον ἀμείνονα τοῦδε νοῆσαι. | 7歌358 | 12歌232 | | |
| | εἰ δ' ἐτεὸν δὴ τοῦτον ἀπὸ σπουδῆς ἀγορεύεις, | 7歌359 | 12歌233 | | |
| | ἐξ ἄρα δή τοι ἔπειτα θεοὶ φρένας ὤλεσαν αὐτοί. | 7歌360 | 12歌234 | | |
| | お前は本当に私にとって全く気に入らないことを言う。お前はこれらより良い他の言葉を心得ていると知っているはずだ。だがもし本当に性急にもそのことを言うのであれば、それは神々自身がお前の分別を破壊してしまったのだ。 | パリス | ヘクトル | | |
| 13 | αὐτὰρ ἐγὼν ἐρέω ὥς μοι δοκεῖ εἶναι ἄριστα· | 9歌314 | 13歌735 | | なぞり型 |
| | だが私は自分にとって最も良いと思われることを言う。 | アキレウス | プリュダマス | | |
| 14 | μὴ νεμέσα· τοῖον γὰρ ἄχος βεβίηκεν Ἀχαιούς. | 10歌145 | 16歌22 | | 裏切り型 |
| | 不機嫌にならないでくれ。それほどの苦痛がアカイア勢を襲ったのだ。 | ネストル | パトロクロス | | |
| 15 | ἀλλ' ἄγε δὴ στέωμεν καὶ ἀλεξώμεσθα μένοντες. | 11歌348 | 22歌231 | | なぞり型 |
| | さあ、今や我々は動かずに、踏み留まって防ごう。 | ディオメデス | 女神アテネ | | |
| 16 | αὐτὰρ ἐγὼ κεῖσ' εἶμι καὶ ἀντιόω πολέμοιο· | 12歌368 | 13歌752 | | なぞり型 |
| | だが私はそこへ向かい、戦いへ臨む。 | 大アイアス | ヘクトル | | |
| 17 | αὔδα ὅ τι φρονέεις· τελέσαι δέ με θυμὸς ἄνωγεν, | 14歌195 | 18歌426 | | なぞり型 |
| | εἰ δύναμαι τελέσαι γε καὶ εἰ τετελεσμένον ἐστίν. | 14歌196 | 18歌427 | | |
| | あなたが思案していることを言ってください。心から実行しようと努めます。もし私に実行できる力があり、それが実現可能なことであれば。 | 女神アプロディテ | 神ヘパイストス | | |
| 18 | ἀλλ' ἔχεο κρατερῶς, ὄτρυνε δὲ λαὸν ἅπαντα. | 16歌501 | 17歌559 | | なぞり型 |
| | そこでお前は屈強にも踏み留まって、例外なく男たちを奮い立たせよ。 | サルペドン | 女神アテネ | | |
| 19 | (…). ἀλλά σ' ἔγωγ' ἀναχωρήσαντα κελεύω | 17歌28 | 20歌196 | | 裏切り型 |
| | ἐς πληθὺν ἰέναι, μηδ' ἀντίος ἵστασ' ἐμεῖο | 17歌29 | 20歌197 | | |
| | πρίν τι κακὸν παθέειν· ῥηχθὲν δέ τε νήπιος ἔγνω. | 17歌30 | 20歌198 | | |
| | そこで私はお前に、不幸を被る前に、私に向かって立ち止まらず、引き返して群衆の中へ向かうことを主張する。終わった後なら子供でも分かるのだが。 | メネラオス | アキレウス | | |

## 3. 場面転換の効果

### 3-1. 前後の場面の展開

同型表現の用いられている直前は、19 例中 18 例が似たような文脈でその表現が用いられている。文脈が全く異なる 1 例を「例外」とする。一方で、その場面の後の展開については、「発話者にとって前の同型表現の展開をなぞるもの」と「発話者にとって前の同型表現の展開を裏切るもの」があった。

以下ではそれぞれを「なぞり型」と「裏切り型」と称する。裏切り型の中には、良い展開が悪い展開となってしまったものと、その逆も含む。18 例中の内訳は、なぞり型が 9 箇所、裏切り型が 9 箇所である。

**3-2. 発話者の属性から見る展開**

『イリアス』に登場するキャラクターは、いくつかの属性に分けられる。ここでは特に、行動原理が独特である神々と戦士の属性に注目して観察していく。表中には戦士以外の役職の人間と神々が分かるように発話者を記した。特に記述の無いものはアカイア勢かトロイア勢いずれかの戦士である。

まず神々は、英雄を含めた人間たちとは異なり、不死性を持つ。また神々の力は強大なもので、人間の運命を翻弄する。両場面とも神々のやりとりから成り立つものは、9 番と 17 番である。これらはいずれもなぞり型の展開であり、神々が行うことは絶対的であるとの認識に一致する。また、発話者が神の場合、より高位の神に妨害されることがなければ、当然のことながら発話した神にとって良い展開となる。神の意が叶わないということは、ギリシャ神話の文脈においてあり得ないことである。

一方戦士たちが最重視するのは名誉であり、その為なら命を捨てることも惜しくないとされ、反対に名誉を捨てて命乞いをすることは恥とされる。特に英雄と呼ばれる者たちは、何よりも名誉にこだわり、名誉が失われたと感じた時には味方でさえも殺そうとする。そういった行動原理を持つ戦士たる登場人物は最も多く、発話の回数も多いが、表中で特徴的だった発話は「宣言」と「挑発」だ。

「宣言」は、「今からお前を殺す」といった敵兵に対するものもあれば、「あちらに行って勇気を奮って戦おう」という味方に対するものもあるが、特徴としては「自分がその行為をなす」という意を含む。自分の言ったことが果たせなければ、名誉は損なわれた状態になってしまう。一部に戦う神の発言も含めるが、1 番 8 番 10 番 13 番 15 番 16 番の 6 例が挙げられ、いずれもなぞり型の展開となっている上に、これらの展開では全て発話者にとって良い展開となっている。

「挑発」は、宣言とは違い、「相手を貶める」意を含むもので、敵兵に関する言及となっているのが特徴である。これは 11 番と 19 番の 2 例で、いずれも裏切り型の展開となっている。

また、神に関わる発言である 2 番 3 番 4 番 5 番 12 番の 5 例は、いずれも裏切り型の展開となっている。これらは自分の夢を解釈したり、神に祈願したり、凶兆を否定したりする場面で、人間である戦士たちにはどうすることも出来ない運命に関する発話である。しばしば祈願したことや解釈したことが神々の意志と異なっている場合がある。神々の力は人間には決して及ぶものではないので、この場合は神々の意図が優先され、良い結果に終わることもあれば、神々に欺かれてしまうこともある。

以上を踏まえると、戦士たちが宣言したことを果たせずに名誉を損なうことはない。しかし、それ以外の事柄について、特に神に関わる問題については、予期出来ない展開となっている。英雄は名誉を死守するという伝統を守りながら、安易に先の読めない場面展開を詩人は作り上げているのである。

更に、神による発話と人間による発話が同じ場合、場面転換が対比されるのかを調査した。

結果は、なぞり型が 1 番 8 番 15 番 18 番の 4 例、裏切り型が 2 番 6 番の 2 例と、必ずしも対照的な展開ではないため、発話者の神にとって良い展開となることは当然であるが、同じ発言をした人間が必ず悪い結果を被る訳でもない。つまり、神と人間の単なる対比より、上述した戦士の行動原理の尊重の方が優先されており、それによりここでも安直に展開を予想させることを防いでいる。

**3-3. トロイア滅亡の予示の効果**

同じ表現にも関わらず、前後の文脈が正反対となっているのが、7 番である。表中にある「イリオス」「プリアモス」はそれぞれトロイアの城と王を指す言葉である。第四歌では、アカイア側の主将アガメムノンが弟メネラオスに向かって言う、勝利への確信であるが、第六歌ではトロイア側の主将へ

クトルが妻アンドロマケに言う、敗北の確信である。トロイア側の主将から発されることによって、トロイア滅亡が揺るがない事実であることを決定づける。

この部分に関しては、先行研究でしばしば指摘されている。特に、自国の滅びを予示することになっている第六歌のヘクトルの発言について、多くの解釈がなされている。川島はこの発言をヘクトルの覚悟の象徴と捉えている[8]。一方高谷は妻を思いやる優しいヘクトル像を提示する[9]。

しかし、この発言が単にヘクトルの人物像を示すだけのものとは考えられない。トロイアが滅びることを知っているのはアガメムノンやヘクトルだけではない。『イリアス』を謡う詩人や、それを聞く聴衆もまた、ギリシャ神話に親しむ限り、トロイア戦争はアカイア勢の勝利に終わることを知っている[10]。仮にヘクトルがただ勝利を盲信している状態であれば、作品全体が互いに勝利を目指すだけの、しかもアカイア勢が勝利すると決定している単調なものとなってしまう。だが、トロイア側の勇将ヘクトルが自国の滅亡を理解している状態、すなわち、詩人や聴衆と同じ了解を持っている状態になれば、「その中で彼がどう生きるのか」という視点が生まれやすくなる。滅びを強く意識することで、反対に「今、存在するトロイア」に焦点が当たるのだ。トロイアが滅亡するという予示は『イリアス』において数多く出てくる[11]。それは、ギリシャ神話において揺るぎない結果である。そこで、その結果を作品内においても分かりきったものとして提示することによって、むしろ過程へと目を向けさせ、作品を語りうる価値のあるものとして維持する効果があるのである。

**研究成果**

本研究では、先行研究で言及されていながらもまとめられていなかった、『イリアス』内で一行以上の表現の一致が確認できるリストを完成させ、『イリアス』理解へと貢献した。その調査結果を用いて、韻律や同型表現の技法、登場人物の行動原理といった、制約とも言える多くの伝統を守りながら、その制約をむしろ積極的に利用して、安易に展開を予想させず、作品全体を単調なものとしてしまわない高い文学性があることを示した。また、滅びの運命にある者たちがどう生きたのか、ということに焦点を置くことで、聞き手が顛末を知っていたとしても飽きさせない効果を『イリアス』は持っているということを論証した。

**参考文献リスト**

・ホメロス『イリアス』（上）松平千秋訳、岩波文庫, 1992
・ホメロス『イリアス』（下）松平千秋訳、岩波文庫, 1992
・Homer. *The Iliad I* . Ed. A. T. Murray. London. Harvard University Press: 1924
・Homer. *The Iliad II*. Ed. A. T. Murray. London. Harvard University Press: 1925
・Homeri, *Ilias*. Ed. D. B. Monro & Th. W. Allen. Oxford, Oxford University Press: 1920
(BIBLIOTHECA AUGUSTANA が準拠しているテキスト。(2017/09/01 閲覧)
URL:https://www.hs-

[8] 川島、p. 194
[9] 高谷、p. 34
[10] 「すでにホメロスの時代においてまとまった形をとっていたギリシアの英雄伝説は、(…) 主要な筋が恣意的に変えられることはほとんどなかった。(…) 例えばアキレウスがトロイアで戦死したことやトロイアの城が木馬の計略によって陥落したことは、すでに「歴史性」をそなえた伝統的物語であり、これを全く新しい内容に置き換えることはできない。」(岡、pp. ⅲ-ⅳ)
[11]女神ヘレによるトロイア滅亡の意志（*Iliad*. 4. 20-72）や、オデュッセウスによる、十年目でトロイアを攻め落とすことになるというカルカスの占いの引用（*Iliad*. 2. 278-332）など。岡は、女神テティスによる「アキレウスがトロイアに留まるなら、不滅のほまれがあるだろう」という予言の「不滅のほまれ」はトロイア陥落を指すとしている。(岡、p. 20)

augsburg.de/~harsch/graeca/Chronologia/S_ante08/Homeros/hom_il00.html）
・高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、岩波書店、1982
・ジャクリーヌ・ド・ロミーイ『ホメロス』有田潤訳、文庫クセジュ、白水社、2001
・岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』、創文社、1988
・川島重成『「戦さは男の仕事」？――『イリアス』第 6 歌におけるヘクトル像再考――』、「人文科学研究　（キリスト教と文化）」46 号、pp. 169-205、国際基督教大学キリスト教と文化研究所、2015
・高谷修『『イリアス』第 6 巻におけるヘクトールとアンドロマケーの別れの場面について：ドライデンとポープの英訳を中心に』、「英文学評論」75 号、pp. 21-68、京都大学総合人間学部英語部会、2003